

中日新聞「リンクト」
LINKED
plus+
病院を
知ろう

先人から築かれてきた 医師を育む〈伝統〉。

医師教育特集

愛知県厚生農業協同組合連合会 **安城更生病院**

企画制作○中日新聞広告局 編集○プロジェクトリンクト事務局



どんなメンバーでも機能する 最高のへ外科チームを。 そのために築いた教育環境。

同院の外科を束ねる新井利幸副院長兼外科代表部長には、思い描く理想の姿がある。それは、一人の傑出した医師がいる外科ではなく、どんなメンバーでも機能する強固な組織を創り上げることだ。ただ、これには、若手医師を優秀な戦力へと押し上げる育成の仕組みが欠かせない。初期研修後期研修先に同院を選び、着実に成長を続ける一人の若き医師の姿から、同院の医師育成の実情を追った。

1 CHAPTER 実臨床を意識した ローテーション研修と 早期の実践経験。

「大事なところはそこじゃない」。医師たちが一堂に会して行う外科のカンファレンスで、淡々と進んでいたプレゼンに指導医から厳しい言葉が飛んだ。後期研修1年目の医師が、患者の病状や

検査内容を報告していたが、指導医の目には明らかに準備不足だと映ったのだ。

「画像の見方、違うでしょ。いつも

増して強い激に、緊張感が漂うなか、

次のプレゼンを始めたのが、後期研修2

年目の余語孝乃助医師だった。

「この患者の症状は...」。担当患者の

症状を的確にとらえた説明にうなずく

指導医たち。その後は検査内容の確認、

他の検査の必要性の有無など、冷静な議論が交わされ、発表は無事終了した。

外科の定期カンファレンスでは、画像

の見方や手術のポイントが毎回チェック

される。余語も指導を受けるたびに知

識を深めてきた。カンファレンスは大切

な学びの場。「ここで勉強することはと

ても多いです」と余語も話す。

同院の研修医が担う一番の仕事は、

救急外来。さまざまな症状、疾患の患者を診ることは、重要な学びとなる。

そのため、初期研修1年目は、約1カ

月間の座学を通じ、救急外来に必要な

最低限の知識を各診療科の医師から学

び、5月頃から当直に入る。ただ、1

年目の研修医が1人で当直に入ること

はない。必ず1年以上の先輩とペアで診

療し、分からないことはさらに上の先輩

に、そして上級医に相談する屋根瓦式

のフォロー体制が築かれている。「急に

心拍数が上がるようなときには、すぐ

上の先生に相談すればいい。フォロー体

制が万全ですから安心です」（余語）。

これは外科に限らず、どの診療科でも

共通している。

また、1年目のうちに救急の実践力

を身につけられる診療科をすべて回ると

も特徴だ。余語も、「救急外来の診療

に必要な知識を重点的に学べ、すぐに

自分の実診療に役立ちますから、学習

意欲も持ちやすいです」とメリットを口

にする。後期研修になれば、実際に執

刀する機会も多く、術後の経過観察や、

退院後の外来診療なども担当。一人の

患者に深く関わることになる。

さらに、「コメディカルを含めて雰囲気

がいい」のも、余語が感じる同院の魅力。

指導医である新井は言う。「当院

は伝統的に職員の人柄が良く、『こうい

うことがしたい』という思いを全力でサ

ポートするなど、人的資源に恵まれています」。

こうした恵まれた環境が整って





静寂に包まれた外科病棟で
 淡々と進むカンファレンス。
 指導医から時折飛び出す
 厳しいチェックは、
 研修医たちの確かな成長の糧だ。
 同院では、多忙な救急外来を担う
 研修医たちの成長を見据え、
 実臨床にすぐに役立つ
 研修プログラムを整備。
 一流の医師を育てるべく
 熱を帯びた指導が
 練り広げられている。



COLUMN

●本文中でも触れた通り、安城更生病院で行われる臨床研修は、実臨床を見据えた各科ローテーションを早期に実施する点に特徴がある。1年目は救急に早く慣れようとするため、1〜4週間程度の短いスパンで診療科を回り、必要最低限の知識を早い段階で習得。その分、2年目以降は、比較的自由な時間を確保し、興味がある分野に比重を置きながら学びを進め、最終の進路を決定する。2年目の夏に外科へと進路を固めた余語は、その後、執刀を経験したり、学会発表の指導を受けたりと、外科の一員として専門的なプログラムを受け、より深い知識を習得していった。

●同院のさらなる特徴の一つが「教育研修・臨床研究支援センター」だ。不安や悩みなどを気軽に打ち明けられる保健室のような存在で、壁にぶつかったときの心の支えとなるほか、研修に対する希望や要望を聞き入れ、調整役を担っている。

病院を
 知ろう



外科は、個人でやるものではない。一人の飛び抜けた天才がいるより、どんなメンバーでもきちんと機能する優秀な組織を作ることが大事——。そんな信念を持つ新井副院長のもと、同院では、若手一人ひとりを育て安定した医療を提供できる強い組織づくりを進めている。そして、恵まれた教育環境で、多くの研修医たちは、医師としての力を日々高めている。

おり、余語医師も「安城更生病院は研修医にとって最高の教育環境」だと感じている。

2 CHAPTER 理想の「安城モデル」 その構築に欠かせない 充実した教育体制。

整った教育体制を持つ安城更生病院。そのなかで外科が特に医師教育に情熱を傾けるのは、新井が思い描く理想のチームづくりを実現するという目標があるからだ。

同院は、地域の最後の砦として、二次医療圏で発症するあらゆる疾患への対応が求められる。もちろん外科も例外ではなく、すべての外科領域で標準治療を提供し、標準治療が難しい患者にも対応できる能力を持たなければならぬ。これを支えるのは、ずば抜けた「個」ではなく、優秀な医師たちが結集した「組織」だと新井は考えている。「医師の入れ替わりの影響を受けない、属人的ではない安城独自の体制と術式、いわば「安城モデル」を創り上げたい」と新井。そのため、これまでの伝統を土台にし、医師一人ひとりがスキルアップできる環境づくりを進めてきた。「手術チームには必ず1人は若手を入れるなど、なるべく診療に携わる機会を多く提供できるように努めています。経験からでしか学べないことはたくさんありますから」。患者の安全を確保した

上で、若手の底上げに力を注いできた結果こそ、余語医師らがのびのびと育つ充実した教育体制なのである。

後期研修2年目の余語は、残り1年ほどで同院を一旦離れることになる。そんな余語に新井副院長は、「自分が専門としたい興味のある分野をとにかく極め、そこに軸足を置いて広く勉強してほしい」と期待をかける。

余語の目下の目標は、難しい手技に

BACK STAGE

常に学びが欠かせない 医師という職業。

● 医師とは、常に学びが必要な職業である。医学部に入学し、6年間の勉強を経て医師免許を取得すれば終わりではない。その後2年間の臨床研修が法律で義務づけられているほか、後期研修としてさらなる学びが求められる。また、医療は日進月歩で進歩を続けており、新たな疾患への対応、最先端の手法の習得や、最新機器の知識も身につける必要がある。立ち止まることが許

挑戦し、自分が主導できる手術を増やすこと。そして、「今は特定の専門分野に特化する医師が主流ですが、私は欲張りですから、まずは何でもできるような医師になりたい」と抱負を語った。余語医師がさらなる成長を遂げ、頼れる責任者として舞い戻ってくる——。同院を離れ、再び戻ってくるのは10年以上先のことだが、新井副院長はそんな明るい未来を思い描いている。

されないのが、医師という仕事なのである。

● そんな生涯にわたり続く医師の学びの土台を作るのが、初期研修である。この最初の一步をどのように踏み出すのか、周りがどう支えるのかによって、その後の医師人生が大きく左右され、将来を決定つけてしまうといっても過言ではない。若手をきちんとサポートすると同時に、成長を促すための実践の場を数多く提供している安城更生病院。同院の教育環境は、医師としての第一歩を踏み出す上で、まさに理想的なスタートラインであるといえる。

企画制作

中日新聞広告局

編集協力

愛知県厚生農業協同組合連合会

安城更生病院

〒446-8602

愛知県安城市安城町東広畔28

TEL 0566-75-2111 (代表)

FAX 0566-76-4335

http://anjokosei.jp/

お問い合わせ

中日新聞広告局広告開発部

TEL 052-221-0694

FAX 052-212-0434

プロジェクトリンク事務局

TEL 052-884-7831

FAX 052-884-7833

http://www.project-linked.jp/

プロジェクト

検索

LINKED VOL.28 タイアップ

病院を
知ろう

中日新聞
「リンク」LINKED
plus+